

緊急指令：白い象をさがせ！—君の「白い象」はどこにいる—

橋本賢二

生み出す苦しみ

本学図書館のリポジトリサービスからインターネットで論集の全文を公開するには、今年から全執筆者の承諾を得ることが必要になった。例年簡単に行ってきたことが急に困難になってきた。さらに前期と後期で時間枠が変更されている科目が増えてきて、前期には受講できていた学生が後期には兼ね合いにより受講できなくなるという傾向も増している。それにより通年で受講する学生数も例年以上に読みづらくなりつつある。多くの学生が前期だけで終了する可能性も視野に入れながら、後期の本番に向け予定を進めていかなければならない点が悩ましい。夏休みをどのように使うべきかが、近年いっそう難しくなってきたのである。つまり後期に受講しない学生にとって「夏休みの課題」など何の意味もなくなったというわけである。

さらにいろいろな用務が重なって、じっくりこの先の展望を考える時間もなくなり、あせりが生まれ始めた。さあどうしよう、なかなか今年の具体的な活動手法が決まらない。

もうそろそろはっきりとした指示を出しておかないと前期が終了し、時間切れがきてしまう不安が頭をよぎり始めた。「ウーム、しらべて、たのしむ・・・たのしい、けんきゅう・・・」、そのとき急に上から何かが下りてきた。白い何か。

「そうだ前期に読んだ作品と関連づけて、調べることを楽しもう。作品に関連したことならなんでもいい、最終的にそれが作品を読むための少しのヒントを与えてくれるならなおいい。何でもいい、調べ捜すことが楽しいと思えることを、この短篇と関連させて見つけてみよう。そうだ【君の白い象】を捜してもらおう」

前期の授業で使ったアーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway:1899-1961)の短篇「白い象のような山並」(“Hills Like White Elephants”)は20世紀型アメリカ短篇小説の典型的なモデルとして、その後の多くの作家に影響を与えてきた隠れた傑作である。会話が中心で、登場人物の名前も正体も不明なまま作品は始まる。解説を一切排除して、映画のワンシーンのように、読者の目と耳を暑い駅での一組の男女のやりとりに直接向けさせていく。何かが起きている、しかしそれは何かわからない。

この作品はその構造からいろいろな読みを可能にする珍しい短篇である。それゆえにかえってその深みが魅力となり、演劇の世界では台詞回しの練習や入学・入団・入社の試験にも用いられているほどの作品である。言葉の裏に潜む思いを考えながらセリフを読ませる授業や、いろいろな結末を考え討論しあう授業や、これまでの二人の人生を想像して話し合う授業など、近年では学校、大学で利用されることも増えてきたすばらしい短篇小説である。

原文や翻訳はインターネットでも公開されている。翻訳サイト「陰陽師的日常」の翻訳はたくさんあ

り、いつもありがたい。（アーネスト・ヘミングウェイ「白い象のような山並み」前編・後編）

そんなヘミングウェイの魅力たっぷりの作品を使って、夏休みに大いに調査を楽しんでもらうことはできないだろうか。とりあえず手法は決まり、具体的な展開も見えてきた。そして指令書は完成した。

MAIN REPORT

緊急指令「白い象を捜せ!!」

論集『調べて遊ぶ楽しい研究』（仮題）の夏季活動について

指令：キーワードをハントせよ！

アーネスト・ヘミングウェイの傑作短篇「白い象のような山並」“Hills Like White Elephants” にでてくる鍵語・重要語を街なかを探せ。

「白い象なんて見たことないな」あの男のセリフが耳に残る。ではその白い象を見つけてきてもらおう。お釈迦様の誕生を祝う花祭りには白象が登場する。アジアの伝統の中での白象の価値観とはいかがなものか、その目で確かめてきて欲しい。なにぶん上司の司令官殿は高齢で動けなくなった。インターネットや噂を手がかりに、現地へ赴き、写真などを撮り、インタビューや聞き取り調査、書物等での調べを加えて誰にでもわかりやすく報告してもらいたい。新学期に提出してもらおう。

キーワードは「白い象」に限らない。たとえばあの臭い酒「アニス・デル・トロ」や「リコリス」や「アブサン」でもよい。それらを詳しく調査すればよい。現地調査が少しでも入っていれば楽しいだろう。もちろん作品の評価に多少なりとも貢献すればもっとすばらしい。「エプロ河」といった固有名詞や漠然とした「ホテルのシール」や「乗換駅」といったテーマでもよい。たとえば「作品の舞台にいちばん似た場所を日本国内に探す」とか、「大阪にあったバルセロナ」「スペイン村でスペインはどれくらい感じられるか」など、作品と多少くらいはずれていてもかまわない。ただし最初と最後にこじつけておくこと。また直球勝負を望むなら作者の Ernest Hemingway に関する影を日本に捜してみてもよい。もちろん海外に出かけて、スペイン、アメリカ、キューバなどゆかりの場所をじかに見てくるもよし。ただしすべて自己責任の中にあるので、くれぐれも注意して行動すること。そのときはできればチームで活動する方が望ましいかもしれない。また未成年は飲酒など絶対にしないように。先方には礼節を尽くし、失礼のないように行なうこと。詳しくは別紙参照。

【楽しくさがす】 ことが目標なので、何も見つからなかったら「動物園で見つけた白い動物シ

リーズ」でも許す。「白いサイ」、「白いキリン」、「白い熊」これは×、「白い虎」などを観て、「白さ」について考察するもよし。「白い象のような山並を日本に見つけた」「みつからなかったのに白い馬のような山について」などでも可。ただし手抜きはダメ。

許可を取ってから写真を撮影し、画像データを保存しておく。のちに編集して報告書に簡単な説明（キャプションなど）をつけて組み込んでおく。完成したデータは保存しておく。「いつ、どこで、だれが、なにを、どのように、なぜ」といった取材報告の基本はすべて忘れないように。

分量：ひとりあたり A4 サイズ入力で写真入れて 5 枚（から 6, 7 枚）程度。文字の大きさは過去のを参考に。最後にこちらで編集する。二人連名で取材報告する場合はその 2 倍。二人で行なったひとつの調査に関して別々に違う角度から報告してもよい。3 名以上で得意分野を活かして分担執筆なども可能。

体裁：魅力的なタイトルを大きく書く。思わず読みたくなるかも。ただしやりすぎはダメ。右に氏名のみ記入。章立てて、中央に章の題をつける。章番号は不要。最後に参考文献・参考サイトがあれば簡潔につける。

形式：導入、取材、紹介、調査、研究、論考、感想などを基本として、読みやすく発見があるように書いていく。何かを見つけることのワクワク感、喜びが伝わるように。見つからなかったけれども違うものに気づかされた、など。導入部では、どのような状況でなぜこのテーマにしたのかを書き、いつごろどこへ…と書き始める。そこであった苦労や、失敗も盛り込みつつ、先へ進める。

取材はメモ、インタビュー、録音、撮影などだが、くれぐれも失礼がないように法律を守り、事前に許可をもらってから進めること。掲載の許可がない場合は載せないこと。名称など間違えず記録しておくこと。大学の名誉を汚さぬこと。自身に危険が及ばないようにくれぐれも注意すること。すべて自己責任で行なうものとする。取材報告だけで終わらず、帰ったあと検証しなおし、取材で得たことを反芻し、何がしかの成果をそこに探してみよう。

不明な点は何でも気にせずメール等で相談してください。

シラバスにあるメールアドレスで結構です。

提出方法：後期も受講する人は

後期授業の初回にプリントアウトしたレポートを提出。こちらで赤を入れて修正を指示する。再度提出し OK となったらデータを送る（基本は誤字脱字等微修正）。後期成績にプラス。

前期のみで終わる受講生は

9 月末日までにデータを ×××××@××.××××.××.××(教育用)へ E メールで添付して提出する。そして指示を待つ。

注 意 事 項

活動はすべて自己責任の下に行なう。

取材は強制ではない。これらの活動はすべて日常生活の一環として収まる範囲内の行動に限定し、可能ならば行う。危険の伴うことや、法律に触れること、名誉を汚すこと、モラルに反する行為は行わないこと。また活動中に起きた事故や災害に対しても、誰も責任を負えないので、危険な場所には絶対近づかないこと。また活動は単独ではなく、ペア、またはグループを組んで行うと助け合えてより安全になる。

事前に十分な準備と、できる範囲で根回しをして臨むこと。予期せぬ発見はすばらしいものである。しかし喜び勇んであわてて行動し、関係者の邪魔になったり、迷惑をかけたりしないこと。常に細心の注意を払い、すべてに関して許諾を得てから落ち着いて行動すること。クレームに関しては本人以外誰も対応できないことを念頭においておく。

現地取材、フィールドワークを行わず報告書を作成してもよい。基本はキーワードについて深く調査し作品評価の一助となる論考を書く。インターネットや本などから集めた情報だけでもよいが、著作権を侵害したり、丸写しになったりして盗作問題を引き起こさないこと。文中や最後に出典を明記し、権利の侵害をしないように気をつける。このときには論考に新しい発見がなく、不活発な論述になることも起こりうるので、どうすれば新鮮になるか、何を継ぎ足せば生きてくるかよく考え、自分を描きこむなど書き方を工夫すること。

題名例：「スペインに行ってきた！」「アニス・デル・トロを飲んでみたーあの臭い酒試飲記ー」「駅舎とバーのある風景のなかでー二人で演じてみた in Japan ー」「ヘミングウェイ・クラブ潜入」「九州にあった白い象のような〇〇」「〇〇町のパパ・ヘミングウェイを探して」「生きている白い象を見つけたぞ」・・・

調査報告と論述が必ずしも一致していなくてもよい。別個のものをくっつけた形でもよいが、少なくとも重なり合う部分を見つけて理由付けておくこと。

以上、幸運を祈る。

そして夏休み直前に、なんとか上記の指示文書を全員に配布することができた。

夏休みも過ぎて

しかし9月、夏休みも残りわずかになった頃、前期だけで受講を終了し後期は受講しない学生のレ

ポート提出期限も過ぎた・・・しかし、やはり提出は一件もなく、恐れていた第一状況が訪れた。落胆。白い象はやはり「厄介者」にすぎなかったのか。

新学期、教室には時間変更の影響もあり、やはり前期ほどの学生の数はなかった。それでもそれなりの人数は来てくれた。ほかに卒論指導学生、大学院生。「よし作成しよう」と残りのメンバーで完成を目指すことを決意する。

さらに後期受講者も初日に提出する者はほとんどいない。まだ何も書いていない。しかしこれももう慣れっこ。今から指導しながら、忍耐強く励ましていかなければならない。

それでも真面目な学生は夏休みにしっかりと活動して来てくれていたようで、素晴らしい報告書を持参してくれてくれた。さらにお土産に「白い象！」まで持って帰ってきてくれた。

テーマ変更バリエーションも認めて

あまりに楽しい報告に少し怖気づいてしまった者もいるが、「気にするな、自分らしくあれ、自分にしかできないことを考えよ」「自分がやっていて一番楽しいことを考えよ、必ず君にも優れた部分がある」「趣味は何か、バイトは、部活は何をしている?」「知ってみたいことをフィールドで調べてみることはできるか?」「インターネットでもいい、何か調べたいことを探せ」・・・

白い象と関係ないけれども海外へ行った学生も多かったので、その写真を見せてもらい、その体験を聞きながら、何か使える手法はないかと考えた。こじつけを考えるのはこんなテーマを考えた教師の仕事だ。韓国とディズニーランドに行ってきただけの学生が買って来たもの、食べたもの、たのしかったことを聞くうちにひらめいた。おいしいものを食べ、きれいになるためのものを買って、ドキドキする乗り物に乗り、かわいいものを見て、その恰好をまねて服を着る。これこそ「少女の旅」「女旅」の目的の真髄ではないか。きっと「白い象のような山並」の少女ジグも、男と同じ旅はしていても心の中ではまさに男とは相いれない平行線だったのではないだろうか。そう考えれば、こんなレポートにもこの作品を読むときの参考はあるし、それを意識して書けばそのレポートのどこかにも「白い象」はいるはずである。

こんな理屈を披露しながら、励ましつついろいろな体験レポートを「白い象」と絡ませていった。夏休みに台湾で小学生に日本文化を教えた体験はどこにも「白い象」は出てこなかった。しかしその異文化体験自体にきっと何かの学びがあり、その出来事からなにかが自分の中に生まれたかもしれない。それは影の見えない「白い象」だったのかもしれない。

このように白い象はいろいろと姿を変え、様々なものの中に入り込み、ほとんど姿を見せなくなりそうになった。しかし「その短篇作品を読むときに何らかの参考になる」ことだけは常に意識してきたので、無関係に見えるレポートにも少しは「白い象」の景色がみえるかもしれない。

そして集まったものが以下にあります。必ずしもすべてが白い象にまつわるものではありません。「読んで楽しいものは、書いている人が楽しかったもの」「調べることを楽しもう」それを主眼に置いた報告もあります。このようにレポートのはっきりとした共通項はなかなか見つかりそうにありません。ちょうどそれは出会えなかったあの「白い象」に似ているようです。

そう考えて全体を俯瞰してじっと眺めていると、なんとこのレポートの隙間に、スペインのエブロ河畔で木々を透かして見えた、あの「白い象のような山並」が浮かび上がっているではありませんか。